

学位論文審査の要旨

		要 旨
学位申請者	山下 正美【論文博士】(比較社会文化学専攻 平成25年3月単位修得退学)	<p style="text-align: center;">要 旨</p> <p>この論文はロシア連邦サハ共和国(ヤクーチア)を中心に居住する民族であるサハの人々が、ホムスと呼ばれる口琴による音楽を復興し再活性化させるプロセスの中で、中心的な役割を果たしてきたホムス奏者たちの諸活動を明らかにすることを第一の目的としている。さらに、そのホムス奏者たちが過去から現在そして未来へと伝えていこうとしていることが何であり、またその活動が、ホムス音楽の伝承や伝播の仕掛けとして今日どのように機能しているのかを考察することを第二の目的としている。申請者は、卒業論文以来継続して口琴の音楽とその奏者の活動について研究しており、最初は日本の口琴の楽器学的な位置づけを検討することであったが、博士前期課程においてサハ共和国での現地調査とサハ語およびロシア語の修得によって、口琴の音楽と奏者の活動へと研究範囲が広がった。博士後期課程では現地調査によってサハ共和国での音楽学研究を踏まえて、ロシア語による文献資料をはじめとして音源や映像の資料を渉猟し、サハの歴史と現在を結ぶホムス奏者の活動に焦点を当てた研究へと至った。現在のホムス奏者としてイヴァン・アレクセイエフやスピリドン・シシーギンの活動を論じると共に、サハの音楽学者であるガリーナ・アレクセーヴェの研究を基にして、ソヴィエト連邦時代に「民俗音楽から専門的音楽」へと口琴音楽を導いた作曲家であり理論家であったマルク・ニコラエヴィチ・ジルコフの『ヤクート民俗音楽』を紹介し、その位置づけを行なった。</p> <p>本論文はサハの外側からの、ホムス音楽に関する最初の学術研究である。</p> <p>審査委員会は最終試験を含めて3回開催され、序論で提示された理論的枠組みを本論において徹底し結論に導くべき大きな筋道を洗練し、さらに、表記上の問題点、参考文献の記述などの細部にわたる修正を要求し、それに対して申請者は適切な修正をした。また、題目についてもより一層内容を反映するかたちで「復興と再活性化」という表現に改められた。公开发表は2月13日に開かれ、多くの参加者があり、ジルコフの時代との相違や近代化のプロセスでの音楽の変化など歴史的視点での質問や、楽器としての12音のホムスなど音楽学の種々の分野から質問が盛んにあり、申請者は適切な応答をした。最終試験では、申請者の語学力について検討し、国際学会での発表など多くの経験を経ていることから十分であることが明らかとなった。以上から、本審査委員会は、この論文が本学の学位論文として優秀なものであり、申請者が博士(人文科学)、Ph.D. in Musicologyに相応しいと判断した。</p>
論文題目	サハの口琴ホムス音楽の復興と再活性化	
審査委員	(主査) 教授 永原 恵 三	
	教授 秋山 光 文	
	教授 棚橋 訓	
	准教授 中村 美奈子	
	聖徳大学 教授 徳丸 吉彦	
インターネット 公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否(否)</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <p style="margin-left: 20px;">イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p style="margin-left: 20px;">ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	